

# 2022年度 千葉明德中学校入学試験（適性検査型入試）

2022年1月21日

## 適性検査Ⅰ（市川会場）

### 注意事項<sup>じこう</sup>

始まりの指示があるまで、下の注意をよく読んでおくこと。

1. 始まりの指示があるまで問題用紙や解答用紙に手をふれてはいけません。
2. 問題用紙は1～6ページ、解答用紙は1枚です。
3. 試験時間は45分間です。
4. 問題は（1）から（3）まであります。
5. 問題の内容についての質問はできません。
6. 携帯電話、電卓、計算機能付き時計など電子機器類を使用してはいけません。
7. 困ったこと（筆記用具を落としたときなど）があったら、だまって手をあげなさい。
8. 持ち物を貸したり、借りたりしてはいけません。
9. 答えはすべて、解答用紙に記入しなさい。
10. 終わりの指示があったら、すぐに筆記用具を置き、解答用紙を問題用紙の上に置きなさい。

○次の文章①と②を読んで、あとの問いに答えなさい。

一

一般的な意味での「自分」というものを考えるときに、絶対に避けられないものが、「他者」である。これは、既に「他者から見た自分」というように、意味的には、「自分以外」のことである。

「他人」という言葉でも良いが、他人というと「家族以外」とか「知り合い以外」という意味合いになるため、紛らわしいので、ここでは「他者」で統一しよう。ようするに家族も知り合いもすべて含む、外の全員のことである。

「自分」を見つめることは、多くの場合、「他者は自分をどう捉えているだろう」とか、「自分は他者に対して何ができるだろう」というように、実は他者と自分の関係について考察することである。本当に、自分だけのことについて考えるのは、かなり難しい。ほとんどできないといっても良いだろう。自分にだけ集中すると、自然や他の生き物といった「自分以外」に考えが及ぶが、それらも排除すれば、最後は「無心」に近い情態になるのではないかと考える。「無心」というのは、心がなないこと、考えないことだから、逆にいえば、「心」や「考え」が、既に他者を意識する概念かもしれない。たとえば、I言葉というのは他者への伝達のために存在するもので、自分一人だけならば、言葉の必要はな

い（これは厳密にはそうではないが、ここではあえてそう書く）。

さらに、たとえば、II「十年後の自分」という他者を想定することもできる。今の自分ではないが、十年後の自分に対して伝えておこう（忘れないように記録しておく）と考えることはある。それは「他者」ではなく「自分」なのではないか、という議論はこの場ではしない。どちらでも良いと思うからだ。

悩みというのは、一般に自分に関するものだけれど、そのほとんどの場合、他者を意識した自分、他者と自分の関係に起点がある。さらに、大半は、不特定多数の他者ではなく、ごく身近の特定された他者である。簡単にいえば、「あの人は私をこんなふうに見ている」「どうしても彼女とうまくいかない」というような悩みが実に多い。

（森博嗣『自分探しと楽しさについて』）

（注）1 情態—状態。

2 概念—意味内容。

僕は22歳で『第三舞台』という劇団を旗揚げしました。この時には、本当にいろいろと障害というか試練があつたのですが、いつも、頭の中には、<sup>注2</sup>ピーター・ブルックの演劇の定義がありました。そして、勇気づけられました。

装置がなくても全然平気、照明はスマホの明かりでもいいし、蛍光灯でもいいし、衣装は自分の好きな服でもいいし、稽古場がなければ公園でもどこでもいい、劇場がなければ道でも喫茶店でも広場でもどこでもいい。Ⅲただ人間がいればいい。そして、それを見つめる人間がいればいい。それが演劇なんだと。

と書きながら、僕は演出家であり劇作家です。ピーター・ブルックの定義を具体的に言えば、演劇は一人の俳優と一人の観客がいれば成立する、ということになります。演出家も劇作家も必要ありません。

それでも僕は、劇団を旗揚げする時、少しも悲しいという気持ちにはなりませんでした。

演出家として、稽古場で一人の俳優の演技を見つめている瞬間が、すでに「演劇」なんだと思えたからです。

演出家は、「最初の観客」と言われることがあります。稽古場にいる「最初の観客」として納得できるものを創り、やがて観客席に座る人々に自信を持って手渡すことが演出家の仕事というこ

とです。

そして、劇作家としては、俳優と観客の最高に素敵な出会いを書こうと思いました。俳優がやってよかったと思い、観客が見てよかったと思える出会いを作ろうと思ったのです。

ピーター・ブルックの定義が書かれた『なにもない空間』は、1968年に出版されたのですが、同じ年、ポーランド出身の世界的演出家、イェジュイ・グロトフスキは、『実験演劇論』（テアトロ）を出版し、その中で、『それがなければ』演劇が存在できないものはなにか、ということが問われなければなりません」と書き、結論として、俳優なしでは演劇は存在しない、また、少なくとも一人の見物人がいないと演劇は存在しないから、「われわれは、演劇を『観客と俳優のあいだで起こるもの』と定義することができません。ほかのすべてのものは補足的なもの——必要ではありません。しかし、やはり補足的で」と書きました。

ピーター・ブルックの定義とまったく同じと言っていいでしょう。

演劇とは、俳優と観客である、ということ、世界的な演出家が共に語っていることが、とても面白いと思います。

ただし、「一人が空間を横切り、もう一人がそれを見つめるのが演劇なら、観客が見るスポーツ大会の一〇〇メートル走も演劇なのか？」という疑問にぶつかる人もいるかもしれません。

厳密に言えば、横切る者は、その行動の目的や動機が虚構で

あると分かっている、同時に、見ている者も、それを分かっているながら受け入れるという前提が必要です。

そして、横切る者、見る者がお互いの構造を理解しているという「意識の共通性」が必要になります。

例えば『走れメロス』（知っているとありますが、知らなければググって下さい）の一シーンとして、親友セリヌンティウスの処刑を止めるために舞台をぐるぐると必死に走っているメロス役の俳優がいます。

「演劇」であるためには、それを見ている人が、彼の走っている理由が虚構（フィクション）だと理解していることが大前提です。

この点がスポーツ大会との違いです。スポーツ大会では、誰も自分の走りをフィクション、つまり現実ではないとは思っていません。全員が、勝つために本気で走っているのです。

そして、見ている人もそう思っています。

ですが、「演劇」の場合は、走っている俳優は、それが彼が生きる「本当の現実」だとは思っていません。彼はメロスではなく、メロスを演じる一俳優だと自分で分かっています。

そして、俳優は、フィクションだと分かりながら、真剣に走ろうとするのです。

また、それを見ている観客も、フィクションだと分かった上で感情移入します。なんとかメロスは親友が処刑される前に間に合

って欲しいと、頭ではフィクションと分かっているながら、熱望するので。

そして、走る者、見る者がお互いに、「フィクションでありながら、受け入れる」という構造を理解していることが大切なのです。

それが「意識の共通性」ということです。

(中略)

さらにこんな風にも考えられます。

私達は、日に何度も自分の役割を変えます。

朝、「母親・父親」として子供に接した後、働いていれば職場に行つて「ビジネスパーソン」になり、会話をすれば「上司・同僚・部下」になり、仕事の後、友人と会えば「友達」になり、家に帰る途中で「近所さんに会えば「近所の住民」になります。

どれが、「本当の自分」だと問いかけることは意味がないと、多くの人は思うはず。

子供に対しての言葉や態度と、取引先の人に対する言葉や態度が違うのは当たり前です。どれもが「本当の自分」であり、どんな人にも通じる「唯一の自分」があると考える方が不自然でしょう。

役割と書きましたが、まさに役です。私達は一日の中でいろんな役を演じているのです。

子供もまた、親の前では「子供」として振る舞い、学校に行けば「クラスメイト」になり、親しい仲間の前では「親友」になり、教師の前では「生徒」になり、バイト先では「社会人見習い」になり、好きな人の前では、「恋するドキドキ」になります。

「本当の自分はなんだ？」と悩んでいる場合ではないのです。つまり、人間は、演じる存在なのです。

その場その場で、必要な自分、求められている自分、生き延びやすい自分、効果的な自分を選ぶのです。

意識して演じる時もあるでしょう。無意識の時もあるでしょう。

どの場合でも、私達は「横切る人」つまり「俳優」です。そして、同時に、「こんな風に振る舞うことが求められているんだ」「こうすると受け入れられると思う」と、状況を想定します。

実際に人からそう求められることもありすが、そういう人がいてもいなくても、「見る人＝観客」を想像して、私達は振る舞うのです。

これは、まさに演劇そのものです。

もっと分かりやすい場合もあります。

例えば、新入社員として入社あいさつの挨拶を職場でしている時、新入社員自身は「新入社員」という役（割）を演じていると意識しています。

同時に、それを聞いている会社の人は、目の前の人物が「新

入社員」という役（割）を演じているんだということを知っています。

お互いに、今、新入社員として振る舞っているという「意識の共通性」があるのです。

これはまさに、演劇を厳密に定義した「横切る者は、その行動の目的や動機が虚構であると分かっている、同時に、見ている者も、それを分かっているながら受け入れるという前提」と「横切る者、見る者がお互いの構造を理解しているという『意識の共通性』と相似形です。

新入社員は、虚構ではないと思われるかもしれませんが、例えば新入社員が「山田一郎」という人物だとして、山田一郎は新入社員であることがすべてではありません。

新入社員であるというのは、山田一郎の属性の一部でしかありません。

前述したように、私達はいろんな場面で役を演じます。固定した立場ではなく、結果として人格も変化します。

新入社員としてガチガチに緊張し、一日、新入社員として振る舞った山田一郎は、その夜、友達との飲み会で、新入社員としての初日を振り返り、新入社員とは違う言葉や行動で友人達と盛り上がるでしょう。

その時、新入社員として振る舞った時間を「虚構」と言っても完全には間違っていないでしょう。

と言つて、嘘うそをついているわけではありません。新入社員として振る舞っている時、山田一郎は真剣です。

それは、俳優が『走れメロス』のメロス役を演じている時、真剣であるということと同じです。

俳優は嘘をついているわけではありません。演劇的虚構は、嘘とは違うのです。メロスという役を演じながら、本気でセリヌティウスを助けたいと思つているのです。

山田一郎は、新入社員という役を演じながら、本気で「この会社でうまくやりたい」「出世しゅっせしたい」と思つているのです。

なんのことはない、私達の人生は演劇そのものだということですよ。

(鴻上こうかみ尚史しやうじ『演劇入門〜生きることは演じること〜』)

(注) 1 旗揚げ―新しく事業を始めること。

2 ピーター・ブルック―イギリスの演出家、プロデュー

サー、映画監督かんとく。

3 虚構―事実でないことを事実らしく作り上げること。

4 ググる―グーグル (Google) でインターネットを検索けんさくすること。

(1) 文章①の傍線部Ⅰ「言葉というのは他者への伝達のために存在する」とありますが、文章②において、「言葉」が成り立つためには、他者の存在以外に何が必要だと述べられていますか。文章②の言葉を使つて、句読点を含めて**四十五字以内**で答えなさい。

(2) 文章②の傍線部Ⅲ「ただ人間がいればいい。そして、それを見つめる人間がいればいい」について、なぜ、(演じる)「人間」に加えて、「それを見つめる人間」が必要なのか。文章①の内容にもとづいて、文章②の言葉を使つて、句読点を含めて**四十字以内**で答えなさい。

(3) 文章①の傍線部Ⅱ『十年後の自分』という他者を想定することもできる」とあり、文章②では、人間は「子供」や「クラスメイト」、「新入社員」の「役(割)」を演じている」と述べています。

自分の役(割)を演じることは、現在の自分にどのような**変化や成長**をもたらすと思いますか。あなたの考えを、次の**条件**にしたがって、**四百字以上 四百四十字以内**で答えなさい。

《条件》

- ① **三段落構成**にまとめて書くこと。
- ② **第一段落**では、「十年後の自分」(将来の自分)を想定するとはどういうことなのかを述べること。
- ③ **第二段落**では、「役割」を演じるとはどういうことかを述べること。
- ④ **第三段落**では、第一段落と第二段落を踏まえて、自分にどのような影響をもたらすのかを述べること。